

# 縁起説における認識過程

唐 井 隆 徳

## 0. 問題の所在

一般的に、各支縁起説は支分の少ないものから多いものへと順次、支分が附加されたと考えられており、その見地からすれば、五支縁起説（渴愛→取→有→生→老死）から十支縁起説へと展開する際、「識（viññāṇa）→名色（nāmarūpa）→六処（saḷāyatana）→触（phassa）→受（vedanā）」という縁起関係が新たに付加されることになる。これらの支分は全て認識作用を持つ用語であり、たとえ後に胎生学的に解釈されようと、「識→名色→六処→触→受」という縁起関係は認識過程を表現しているものと考えてるのが妥当であろう。しかし、「識→名色→六処→触→受」という縁起関係が具体的にどのような認識過程を表しているかを明確に示した研究が見られないように、この縁起関係を文字通りに認識過程と理解することは容易ではない。また、平川彰 [1: p. 434] や Vetter [1988: pp. 46-47] が、五支縁起説と比較すれば、十支・十二支縁起説は理解しがたいと指摘するのも「識→名色→六処→触→受」という縁起関係が判然としないからであろう。

そこで、本稿では初期經典に見られる認識作用の用例を見ていく。縁起説以外の認識作用の用例を調査することで、縁起説に見られる認識過程が既に用意されていたものなのか、あるいは縁起説の展開による所産であるのかを判別し、「識→名色→六処→触→受」という縁起関係を認識過程と見るべきか否かについて私見を述べたい。

## 1. 韻文資料における認識作用

まず、初期經典の中でも比較的古いと言われる韻文資料に説かれる認識作用の用例を眺めてみたい。その際、最古と言われる *Suttanipāta* の第四章 *Aṭṭhakavagga*、第五章 *Pārāyanavagga* を最古層とし、その他の韻文資料を古層として、その展開を追っていく。

### 1. 1. 最古層における認識作用

最古層における感覚器官とその対象に関して、散文資料のように六つに分類する捉え方は見られない。唯一、それに接近する用例として、Sn. 974に色 (rūpa)、声 (sadda)、味 (rasa)、香 (gandha)、触 (phassa) という五つの対象が説かれるのみである<sup>1)</sup>。感覚器官とその対象が六つに分類されていないので、縁起説において頻出する単語である六処 (saḷāyatana) という用語も見られない。

次に、触 (phassa) の用例を見る。散文資料では、六触として説明されることが多い。そこで、最古層に見られる触の用例を挙げる。

Sn. 851

Nirāsatti anāgate atītaṃ nānusocati,  
vivekadassī phassesu diṭṭhiṣu ca na niyyati

未来に執着せず、過去に従って憂えない。

諸々の触に対して離れることを見る者は、諸々の見解に導かれない。

ここでは、触を離れることが誤った見解を滅する条件のように説かれている。このような誤った見解の原因としての触が、各支縁起説に用いられている用

---

1) Sn. 922には、眼、耳、舌の三つに関して説かれている。

例<sup>2)</sup>も散文資料中に見られ、これはその元となる資料であるとも考えられよう。

Sn. 870

Phassanidānaṃ sātaṃ asātaṃ phasse asante na bhavanti h' ete,  
 'vibhavaṃ bhavañ cāpi' yam etaṃ atthaṃ, etaṃ te pabrūmi itonidānaṃ  
 触を因として快、不快がある。触がない時、これらはない。  
 滅や生起ともいうこの道理と、それがこれ（触）を因とすることを私はあなたに言う。

ここでは、「触→快、不快、触の滅→これら（快、不快）の滅」という関係から、受（vedanā）という用語は使われていない<sup>3)</sup>が、縁起説に説かれる「触→受」を想起させる。

このように、最古層で説かれる触は、誤った見解や思想が起こる原因として説かれる用例が見られ、また「触→快、不快」の用例も見られた。一方、六触の用例は見られなかったが、先述したように、これは最古層で六つの感覚器官やその対象が、まだ十分に整備されていなかったことにも起因すると考えられる。

次に、受（vedanā）の用例を見る。受は最古層中一例のみ見られ、以下に示す。

Sn. 1111

Ajjhattaṇ ca bahiddhā ca vedanaṃ nābhinandato  
 evaṃ satassa carato viññāṇaṃ uparujjhati ti  
 内面的にも外面的にも、受を歓喜しない者が、  
 このように自覚し、行じている時、識は滅する。

2) SN. 12, 24 (Vol. II p. 37) DĀc. 17 (T01. 76) DN. 1 (Vol. I pp. 39-45)

3) 散文資料には、快（sāta）、不快（asāta）を受（vedanā）として扱う資料もある。Cf. SN. 48, 36-38 (Vol. V pp. 209-211)

ここでは、内面と外面、両方からの受を歓喜しなければ、識が減するという内容が説かれており、縁起説に説かれている内容とは論理的に逆の構造をとっている。

次に、識 (viññāṇa) と名色 (nāmarūpa) の用例を見る。

Sn. 1037

Yam etaṃ pañhaṃ apucchi, Ajita taṃ vadāmi te,  
yattha nāmañ ca rūpañ ca asesam uparujjhati:  
viññāṇassa nirodhena etth' etaṃ uparujjhati.

アジタよ、あなたが質問したことを、  
名と色が残りにく減するところを、私はあなたのために説く。  
識の滅によって、そこでこれが滅する。

ここでは、「識の滅→名と色の滅」を表しており、各支縁起説に説かれる識と名色の関係を表していると言える。尚、識と名色が関連する最古層の資料はこれのみである。

次の用例は、「名色→触」を説く資料である

Sn. 872

Nāmañ ca rūpañ ca paṭicca phassā icchānidānāni pariggahāni  
icchā na santyā<sup>4)</sup> na mamattam atthi, rūpe vibhūte na phusanti phassā  
名と色によって諸々の触がある。欲求を因として所有欲がある。

欲求が存在しない時、我がものとしない。色が滅した時、諸々の触はない。

ここでは、「名と色→触、色の滅→触の滅」が説かれている。そして、先述

---

4) Cf. Nidd I. 872 (p. 277)

した Sn. 870 に説かれる「触→快、不快、触の滅→これら（快、不快）の滅」と合わせて考えれば、Sn. 869-872 には「名と色→触→快、不快」という一連の認識過程が見出され、生起と滅の論理によって説かれている。

引き続き、次偈（Sn. 873）では色がどのように滅するのかという質問がなされている。その返答に相当する箇所を以下に示す。

Sn. 874

Na saññasaññī na visaññasaññī no pi asaññī na vibhūtasaññī,  
evaṃsametassa vibhoti rūpaṃ saññānidānā hi papañcasamkhā.

想うのでもなく、誤って想うのでもなく、想わないのでもなく、想いを滅したのでもない。

このよう〔な境地〕に結びついた者にとって、色は滅する。なぜなら、妄想によって〔色を〕名付けることは想いを因とするからである。

この資料の abc 句では「想うのではなく、誤って想うのでもなく、想わないのでもなく、想いを滅したのでもない〔境地〕→色の滅」が、d 句では「想い (saññā) →妄想によって〔色を〕名付けること (papañcasamkhā)」が説かれており、想い (saññā) や妄想 (papañca) が色 (rūpa) と関連していることが窺える。さらに言うならば、想いと名色との間に明確な縁起関係が示されている訳ではないが、中村元 [16: p. 391] が「ウパニシャッドから継承した「名称と形態」の根底に想い (saññā) を求めようとしている」と述べるように、最古層 (Sn. 869-874) には、「想い…名と色→触→快、不快」という認識過程が説かれているとも考えられよう。

## 1. 2. 古層における認識作用

最古層から古層への変化として顕著なことは、感覚器官とその対象が散文資料のように分類されるようになったことである。例えば、pañcakāmaguṇā loke manochaṭṭhā paveditā<sup>5)</sup>（世間において五つの欲望の対象があり、意が

5) Sn. 171 SN. 1, 3-10 (Vol. I p. 16)

第六と知らされた。) という表現では、未だ不完全とも言えるが、明らかに六つの分類を意識している表現である。また、ここでの五つの欲望の対象 (pañca kāmagaṇa)<sup>6)</sup> は最古層ではほとんど見られず、古層から現れる単語である。この対象に関して言えば、古層では五つの分類と六つの分類が説かれており、以下に示す。

- ・色(rūpa)、声(sadda)、味(rasa)、香(gandha)、触(phassa, phoṭṭhabba)<sup>7)</sup>
- ・色、味、声、香、触<sup>8)</sup>
- ・色、声、味、香、触、法 (dhamma)<sup>9)</sup>
- ・色、声、香、味、触、法<sup>10)</sup>

以上のように、列挙される順番是不規則であり、韻律によるものと考えられるが、まだ分類の整備が進んでいないとも考えられる。また、対象を五つに分類する場合、それらをまとめる形で、以下の用例のように法 (dhamma) という要素が用いられる場合<sup>11)</sup>もある。

Sn. 387

Rūpā ca saddā ca rasā ca gandhā phassā ca ye sammadayanti satte,  
etesu dhammesu vineyya chandaṃ kālena so pavise pātarāsaṃ  
諸色、諸声、諸味、諸香、諸触は衆生達を陶醉させる。

これらの諸法に対する意欲を取り除き、彼は適時に朝食に取りかかるだろう。

6) Sn. 284, 337 Th. 195, 252, 455, 535

7) Sn. 387 Th. 455, 895 SN. 4, 2-5 (Vol. I p. 111)

8) Th. 643

9) Sn. 759 SN. 4, 2-7 (Vol. I p. 113)

10) Th. 1099

11) 最古層の用例で挙げた Sn. 974 も五つの欲望の対象を説き、次偈 (Sn. 975) で法 (dhamma) としてまとめる。

加えて、Th. 455, 895 ; SN. 4, 2-5 (Vol. I p. 111) では、五つの欲望の対象が「意に適えるもの (manorama)」として扱われており、「意-法」という要素を他の要素と同様、並列に用いるのか、他の要素をまとめるために用いる<sup>12)</sup>のかが定まっていない。

尚、古層において対象の分類に比べ、感覚器官の分類<sup>13)</sup>はあまり説かれていない。

このように、最古層に比べれば、古層における感覚器官と、特にその対象の分類は進んだと言えるが、明確に六つに分類するという傾向ではない。それが理由であるのか分らないが、六処 (saḷāyatana) という用語は最古層と同様、古層にも見られない。しかし、六つの処 (cha āyatana) という用例は一例見られ<sup>14)</sup>、感覚器官が āyatana として六つにまとめられている<sup>15)</sup>。また、六触処 (cha phassāyatana)<sup>16)</sup> という用例が一部見られるようになった。

さらに、付け加えておかなければならないことは、感覚器官の対象の分類がどのような状況下で説かれているかという点である。これまでに列挙した用例を見てみると、単純に分類しているだけの資料は少ない。その殆どが上述した Sn. 387にある *etesu dhammesu vineyya chandaṃ* (これらの諸法に対する意欲を取り除き) という句を見て分かるように、欲求などの煩悩の対象として用いられている。

次に、六つの分類について、認識過程を明確に表した韻文資料が Th. 794-817に見られるので、ここでは「眼-色」に関する箇所のみ示す。

12) Th. 735では、Th. 730-734に説かれる五つの欲望の対象をこれらの法 (*etehi dhammehi*) としてまとめる。

13) Dh. 360-361 It. 28-29 (pp. 22-24)

14) SN. 5, 9 (Vol. I p. 134)

15) Sn. 169には、「六つ (cha)」という表現が見られ、註釈Sn-a. 169 (Vol. I p. 211) の解釈を参照すれば、六内処と六外処を指していることが分かる。

16) Th. 116 Ud. 3, 5 (p. 28)

Th. 794

Rūpaṃ disvā sati muṭṭhā piyanimittam manasikaroto;  
sārattacitto vedeti tañ ca ajjhosa tiṭṭhati.

色を見て、好ましい特徴に心を向けている者の自覚は忘れられる。  
〔彼は〕貪った心で感受し、それに固執して留まる。

Th. 795

tassa vaḍḍhanti vedanā anekā rūpasambhavā,  
abhijjhā ca vihesā ca cittam ass' ūpahaññati;  
evam ācīnato dukkhaṃ ārā nibbāna vuccati.

色から生じる彼の多くの受は増大する。  
貪りや苛立ちも〔増大する。〕彼の心は害される。  
このように苦を積んでいる者にとって、涅槃が遠くにあると言われる。

Th. 806

na so rajjati rūpesu; rūpaṃ disvā patissato  
virattacitto vedeti tañ ca n' ajjhosa tiṭṭhati.

彼は諸色に対して貪らない。色を見て自覚する。  
貪りを離れた心で感受し、それに固執して留まることはない。

Th. 807

yathāssa passato rūpaṃ sevato vāpi vedanaṃ  
khiyyati nopaciyyati evaṃ so caratī sato;  
evaṃ apacinato dukkhaṃ santike nibbāna vuccati.

彼が色を見て、受に従っている時でも、  
〔苦が〕尽き、積まれないように、彼は自覚し、実践する。  
このように苦を除いている者にとって、涅槃が近くにあると言われる。

まず、苦が生じており涅槃に到達していない場合として、Th. 794では、「対



象を見る→好ましい特徴 (piyanimitta) に心を向ける→感受」という認識過程が読み取れる。Th. 795では、sambhava という語を用いて、「色 (対象) → 受」が説かれる。また、Th. 794-795には sārattacitto や abhijjhā ca vihesā ca という煩悩を表す用語が用いられている。ここでも、認識過程と煩悩が関連していることが窺えよう。

一方、苦が減しており涅槃に到達した場合として、Th. 806では、対象に対して貪らないことが説かれているが、認識作用は Th. 794-795と同様に機能していると言える。Th. 807についても、「色を見る→受」という関係性を見出すことができる。

以上のことから、涅槃した者も涅槃していない者も、認識作用は同様に機能する。その相違点は、対象に対する煩悩の有無によることが分かる。

このように、感覚器官とその対象が次第に六つに分類されるようになったが、触<sup>17)</sup>に関して、直接六触が説かれることはほとんどない。しかし、先述したように、六触処という表現を用いて感覚器官を分類している用例が見られるので、散文資料では感覚器官に合わせて、触も六つに分類されるようになったと考えられる。

次に、受の用例を見る。各支縁起説で説かれる受は、ニカーヤでは六受 (眼触から生じる受 (cakkhusamphassajā vedanā) … 意触から生じる受 (manosamphassajā vedanā)<sup>18)</sup>、漢訳では三受 (苦受・楽受・不苦不楽受)<sup>19)</sup>として解説されている資料がある<sup>20)</sup>。以下に受の用例を見ていく。

17) 古層における触の用例を挙げておく。

Ud. 3, 10 (p. 32) :

Ayaṃ loko santāpajāto phassapareto rogaṃ vadati attato  
yena hi maññati tato taṃ hoti aññathā

この世間の人は苦悩が生じている。触に敗れた者は自ら病と言う。

実に人が考えるものと、〔実際の〕それとは異なっている。

18) SN. 12, 2 (Vol. II p. 3)

19) SĀc (1) . 298 (T02. 85b06-b07)

20) これに関して、水野弘元 [1964 : pp. 387-388] は、「眼觸所生の受等の六受は所依の根

まず、六受について言えば、散文資料と同様の表現は見られないが、先述したTh. 794-817には、tassa vaḍḍhanti vedanā anekā rūpasambhavā<sup>21)</sup>（色から生じる彼の多くの受は増大する）という用例が見られ、六つの対象全てについて同じ表現で説かれる。また、三受はSn. 738に「楽、苦、不苦不楽」という表現が見られ、楽受のみ述べられる場合<sup>22)</sup>もあり、受が単に苦痛を表している場合<sup>23)</sup>もある。このように、一例しか見られなかった最古層とは異なり、多面的に受は説かれているが、その中でも感受とは異なる趣意で用いられる受の用例を挙げる。

Sn. 529

Vedāni viceyya kevalāni Sabhiyā ti Bhagavā samañānaṃ yāni p' atthi  
brāhmaṇānaṃ

sabbavedanāsu<sup>24)</sup> vītarāgo sabbam vedam aticca vedagū so.

世尊は〔答えた。〕サビヤよ、沙門やバラモン達にある、その全ての智を  
考察し、

全ての受に対して貪りを離れた者は一切の智を超えている。彼は智に通じ  
た者である。

下線部の veda は vedanā と同じ語根、√ vid の使役形からなる単語であり、  
ここでは沙門やバラモン達の智を表していると考えられる。また sab-  
bavedanāsu も楽や苦といった感受ではなく、veda と同じように沙門やバラ  
モン達の智を表していると言える<sup>25)</sup>。よって、この vedanā は「〔誤った見解

---

の別によって受を区別したものであり、楽受等の三受は受の性質によって受を区別したものであって、両者は観点を異にして受を眺めたものにすぎない」と述べる。

21) Th. 795

22) Th. 1125

23) Th. 1188

24) Sn-a. 529 (Vol. II p. 431. 6-7) :

yo vedanāsu vītarāgo, so pi vedanāsaññakāni vedāni gato atikkanto hoti,  
全ての受に対して貪りを離れた彼も、受と呼ばれる智に至り、超越した者となる。

25) Mvu. (Vol. III p. 397. 17-20) :

vedāni vicārya kevalāni śramaṇānaṃ...

などに対する〕智（知覚したこと、受け入れたこと）」を指していると考えられる。また、Sn. 474には paravediyaṃ diṭṭhiṃ upātivatto（他人が知覚している見解を超越した者）という用例があり、vedanā と同じ語根の vediya を用いて、誤った見解を指している。このように vedanā は感受と訳されることが多いが、同じ語根の動詞や形容詞などは単に「知覚する」「受け入れる」という意味<sup>26)</sup>で訳されることも多い<sup>27)</sup>。

最後に、識と名色の用例を見る。

DN. 11 (Vol. I p. 223. 12-17) :

Viññāṇaṃ anidassanaṃ anantaṃ sabbato pabhaṃ<sup>28)</sup>.

Ettha āpo ca paṭhavi tejo vāyo na gādhati,

Ettha dighañ ca rassañ ca anuṃ thūlaṃ subhāsubhaṃ,

Ettha nāmañ ca rūpañ ca asesam uparujjhati,

Viññāṇassa nirodhena etth' etaṃ uparujjhatīti.

識は見られず、限りなく、あまねく輝く。

ここにおいて水、地、火、風は堅住しない。

ここにおいて長いもの、短いもの、微細なもの、粗大なもの、浄や不浄なものとは〔堅住しない。〕

---

so sarvavedanāsu vītārāgo sarvavedanām atītya vedako ti.

Sn. 529と対応する梵文資料とを比較すれば、vedaとvedanāがほとんど同じ意味で用いられているとも言える。

26) 吹田隆道 [2013 : p. 161] は、五蘊の受が本来、外界の対象物を感覚器官を通して受け止める受信作用を意味し、少し遅れて定着した解釈として、楽苦などの感受作用を意味するようになると述べる。

27) Sn. 214, 251 Dh. 419, 423

28) PTSではpahaṃとなっているが、MN. 49 (Vol. I p. 329) に見られる同じフレーズから、pabhaṃと読む。また、以下に示すように、対応する漢訳資料との比較からもpabhaṃが適当であると言えよう。

DĀc. 24 (T01. 102c17-c19) :

應答識無形 無量自有光

此滅四大滅 麤細好醜滅

於此名色滅 識滅餘亦滅

ここにおいて名と色は残りなく滅する。

識の滅によって、そこでこれが滅する。

この用例は、最古層にも見られた「識の滅→名と色の滅」を表している<sup>29)</sup>。  
また、古層ではこれ以外にも下線部の表現が見られるが、識とは関連しない文脈で使われている<sup>30)</sup>。

古層における識は、dhammaviññāṇa（教えを識別すること）<sup>31)</sup>のように、識別作用を表す用例や、nibbuyhati susānaṃ aciraṃ kāyo apetaviññāṇo<sup>32)</sup>（識を離れた身体は、やがて死体捨て場に運ばれる。）や、aciraṃ vat' ayaṃ kāyo paṭhaviṃ adhisessati chuddho apetaviññāṇo niratthaṃ va kaliṅgaram<sup>33)</sup>（実に、捨てられ、識を失ったこの身体は、無益な木片のように、まもなく地面に横たわるだろう。）のように、識が生命を存続させる要素として用いられる用例も見られる。

一方、名色は煩悩の対象として扱われることが多い。例えば、Acchecchi taṇhaṃ idha nāmarūpe<sup>34)</sup>（彼はこの世で名色に対する渴愛を断った。）、niviṭṭhaṃ nāmarūpasmiṃ<sup>35)</sup>（名色に対して没頭する。）、taṃ nāmarūpasmiṃ asajjamānaṃ akiñcanaṃ nānupatanti dukkhā<sup>36)</sup>（名色に対して執着せず、無所有の彼に諸々の苦は従わない。）、sabbaso nāmarūpasmiṃ yassa n' atthi mamāyitaṃ<sup>37)</sup>（あまねく名色に対して、我がものとすることがない。）が挙げられる。

29) 荒牧典俊 [1976 : pp. 12-13] は、このDN. 11の偈が、最古層で示したSn. 1037に説かれる「識の滅→名と色の滅」に基づいていることを指摘している。

30) SN. 1, 3-3 (Vol. I p. 13) SN. 1, 3-7 (Vol. I p. 15) SN. 1, 5-10 (Vol. I p. 35) SN. 2, 3-4 (Vol. I p. 60) SN. 7, 1-5 (Vol. I p. 165)

31) Th. 1030

32) Thī. 468

33) Dhp. 41

34) Sn. 355 Th. 1275 SN. 1, 2-10 (Vol. I p. 12) SN. 1, 4-4 (Vol. I p. 23)

35) Sn. 756 It. 41 (p. 35)

36) Dhp. 221 SN. 1, 4-4 (Vol. I p. 23)

37) Dhp. 367

次の用例では、名色を認識の対象として捉えている可能性がある。

Sn. 530

Anuvicca papañca nāmarūpaṃ ajjhattaṃ bahiddhā ca rogamūlaṃ  
sabbarogamūlabandhanā pamutto anuvidito tādī pavuccate tathattā.

内と外における病の根本を、妄想と名色に従って知り、  
一切の病の根本の縛りから脱した者がいる。実際には、そのような者が知  
った者と言われる。

a 句の内と外が、それぞれ妄想 (papañca) と名色 (nāmarūpa) に対応し  
ていると思われ、妄想の対象として外の名色が扱われていると考えられよう。  
妄想と名色が関連していると考えられる資料は最古層 (Sn. 874) でも示した。

### 1. 3. 小結

韻文資料における認識作用を持つ用語を見た。以下にまとめる。

- ・最古層では、感覚器官とその対象が六つに分類されることはないが、古層では、五つや六つに分類され始めた。しかし、分類の数は一定しておらず、六処 (saḷāyatana) という用語は見られない。また、Th. 794-817では、明確な認識過程を読み取ることができた。
- ・触について、最古層では誤った見解を引き起こす原因として扱われ、また各支縁起説における「触→受」を想起させる用例が見られた。
- ・受は最古層中一例しか見られなかったが、古層では多様に説かれ始め、六受や三受のような感受を表す用例の他、「知覚する」「受け入れる」という意味で訳されることもあることを指摘した。
- ・識と名色に関して、「識の滅→名と色の滅」を表す用例が最古層と古層で見られた。古層において、識は識別作用を表すほか、生命を存続させる要素として用いられていた。また、名色は煩惱の対象として用いられる用例が多い。
- ・最古層では、「名と色→触→快、不快」という一連の認識過程が、生起と滅

の論理によって説かれていた。

## 2. 散文資料における認識過程

前節 1. では、韻文資料における認識作用を持つ用語を見た。一部、認識過程と思われる関係性も見られ、各支縁起説における認識過程に類似したものも見られた。本節で扱う散文資料には、感官の防護を示す資料として Yatvādhi-karaṇam eṇaṃ cakkhundriyaṃ asaṃvutaṃ viharantaṃ abhiññhā-domanasā pāpakā akusalā dhammā anvāssaveyyuṃ<sup>38)</sup>（その理由で、この眼根が防護されず、留まっている時、貪欲や憂いという悪しき不善なる諸現象が流れ込むだろう。）という用例が散見されるように、認識作用は煩悩や苦を引き起こす要因として扱われている。また、古層でも認識過程と煩悩が関連している資料を既に挙げている。したがって、渴愛を起点とする五支縁起説からさらに展開する時、煩悩である渴愛の原因として認識作用を立てるということに差し支えがあったとは思えない。

本節では、その縁起説に見られる認識過程が、各支縁起説成立より以前に、既に用意されたものなのか、あるいは縁起説の展開による所産であるのかを考察するために、散文資料における縁起説以外の認識過程がどのように表現されているのかを見ていく。

### 2. 1. SN. 12, 19に見られる認識過程

まず、縁起説における認識過程に最も類似していると思われる用例を以下に示し、その認識過程を図示する。

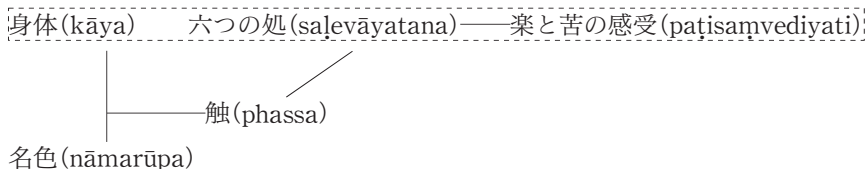
SN. 12, 19 (Vol. II pp. 23. 35-24. 4) :

Avijjānīvaraṇassa bhikkhave bālassa taṇhāya sampayuttassa evaṃ  
ayaṃ kāyo samudāgato||Iti ayaṃ ceva kāyo bahiddhā ca nāmarūpaṃ

38) DN. 2 (Vol. I p. 70)

|| itthetaṃ dvayaṃ dvayaṃ paṭicca phasso<sup>39)</sup> saḷevāyatanāni || yehi phuṭṭho bālo sukhadukkhāṃ paṭisaṃvediyati || etesaṃ vā aññatarena ||

「比丘たちよ、無明に覆われ、渴愛に縛られた愚か者には、このようにこの身体が生じた。このように、この〔主体である〕身体と外に〔客体である〕名色がある。ここにはこの二つ（身体と名色）があり、二つによって触がある<sup>40)</sup>。〔触を成立させる〕六つの処があり<sup>41)</sup>、それら（六つの処）によって触れられた愚か者は楽と苦を感受する。あるいは、それら（六つの処）のうちの一つによって〔も同様である。〕」



まず、主体である身体と客体である名色が対峙している状態が触であり、対峙するのみでは感受しないので、対峙して感覚器官が機能するということで、

39) SN-a. 12, 19 (Vol. II pp. 38. 31-39. 1) :

*Dvayaṃ paṭicca phasso ti, aññattha-cakkhu-rūpādini dvayāni paṭicca cakkhu-samphassādayo vuttā, idha pana ajjhattika-bāhirāni āyatanāni.*

二つによって触がありとは、別の所では、眼と色などの二つによって眼触などが説かれる。ここでは、内処と外処のことである。

40) Tripāṭhi [1962 : p. 142] は、触 (sparśaḥ) の後に Single Daṇḍa を入れており、本稿ではそれに従い翻訳した。

41) 下線部の翻訳は難解であり、ここに諸訳を示しておく。Bodhi [2000 : pp. 549-550] “So there is this body and external name-and-form: thus this dyad. Dependent on the dyad there is contact. There are just six sense bases,” 中村元 [16 : p. 503] 「このように、この身体と、外面的には名称と形態とがある。このようにこの二つのものに縁って触と六つの領域とがある。」 村上真完 [2006 : p. 100] 「この身と外にある名色との二つに縁って觸（対象経験）があって、それが六つだけの処（認識領域）であり、」 片山一良 [相応部3 : p. 140] 「このようにしてこの身があり、また外の名色があります。ここに、この二種があり、二によって触があり、六処があります。」

一方、Aramaki [1985 : p. 100] は、梵文資料 (NidSa. 12) をより原型に近いものとし、“the *nāmarūpa*- for him is this body here [experiencing] with the [six] *viññānas* and the external [objects being experienced] and thus [the *nāmarūpa*-] is the two-fold [experiential bases, subjective and objective]. It is, indeed, conditioned by

六つの処は文脈に従い、触の後ろに位置づけた。点線で囲っている箇所は主体のあり方を示した部分である。

身体 (kāya) と名色 (nāmarūpa) について言えば、対応する梵文資料<sup>42)</sup>には *saviññānakaḥ kāyo bahirdhā ca nāmarūpam* (識を伴う身体と外に名色がある。) とあり、対応する漢訳資料<sup>43)</sup>には「身内有此識。身外有名色。」とある。このように、SN. 12, 19ではただ「身体」となっている箇所が、縁起説における識と名色の関係を意識しているのか、梵文や漢訳では「識を伴う身体」となっている。一方、SN. 12, 19の註釈を見ると、*Ayañ c' eva kāyo ti, ayañ c' assa attano saviññāṇako kāyo*<sup>44)</sup> (この身体とは、この自らの識を伴う身体である。) とあり、梵文や漢訳と同様の解釈をとっていることが分かる。したがって、この梵文や漢訳の解釈は南伝資料では註釈的な位置づけとなり<sup>45)</sup>、原型とは言い難い<sup>46)</sup>。ここでは、主体である身体と客体である名色<sup>47)</sup>という関係性のみを読み取っておく。

次に、六つの処 (*saḥevāyatana*) について言えば、この資料では縁起説に説かれる「名色→六処→触→受」のように、六処を名色と触の間に挿入する縁起関係を説かず、上図の通りである。また、先述した身体 (kāya) の解釈と

---

[these] twofold [experiential bases] that there arises the experience. For the experience there are six kinds of experiential bases here and …”と翻訳する。舟橋智哉 [2003 : p. 325] も、梵文資料の *saviññānakaḥ kāyo bahirdhā ca nāmarūpam* という箇所を「彼にとって名色はここなる (内なる) 有識の身と外なる [対境] とである。」と翻訳しており、Aramaki の訳と類似している。

尚、触と六つの処の関係について、和辻哲郎 [5 : p. 231] は「触、すなわち六入処」とし、触に六入処を含意させていることは明白であると述べ、上述した村上訳もこれと同様の解釈である。

42) NidSa. 12, 1 (p. 140)

43) SĀc (1) . 294 (T02. 83c25-c26)

44) SN-a. 12, 19 (Vol. II p. 38)

45) 北伝資料に註釈書と対応する伝承が存在することは既に指摘されている。Cf. 馬場紀寿 [2003]

46) *saviññāṇako kāyo* (識を伴う身体) という表現はニカーヤでは、*imasmiñ ca saviññāṇake kāye bahiddhā ca sabbanimittesu* (この識を伴う身体と外は一切の特徴に対して) という用例が多く、識を伴う身体に対する客体として、外の名色ではなく、外的一切の特徴をとる場合がほとんどである。このことから梵文や漢訳の表現が原型とは言い難いのではないだろうか。

47) 外界の対象としての名色の用例は、古層資料 (Sn. 530) でも挙げた。



同様、この六つの処に対応する梵文資料、漢訳資料、ニカーヤの註釈は全て六触処と解釈しているが、いずれにしても縁起説で用いられる六処 (saḷāyatana) という用語ではない<sup>48)</sup>。

したがって、以上の考察から、この認識過程が縁起説成立より以前に既に構築されていた可能性が高いと言えよう。また、この認識過程は各支縁起説よりもむしろ、前節で考察した最古層 (Sn. 869-872) における「名と色→触→快、不快」という認識過程に類似していることからそれが言えるのではないだろうか。

さらに、この SN. 12, 19における認識過程で把握しておくべきこととして、上の用例では愚か者についての認識過程を引用したが、その認識過程は賢者 (paṇḍita) であっても全く同じであるということである。それでは愚か者と賢者との相違点は何かと言うと、愚か者は清浄行を行じることなく、無明と渴愛を滅しておらず、苦から解脱しない。一方、賢者は清浄行を行じ、無明と渴愛を滅し、苦から解脱すると説明されており、この認識過程が苦の生起と滅に関わっていることから、この認識過程が縁起説に取り込まれる可能性も十分に考えられよう。

## 2. 2. 「六処・触・受」の関係

散文資料において、名色を伴う認識過程は、先述した SN. 12, 19の用例を除けばあまり見られないので、ここでは感覚器官と触と受がどのように関わっているのかという点を考察する。

まず、改変されることなく、そのまま縁起説にも導入される三事和合説の用例を挙げ、その認識過程を図示する。

SN. 35, 60 (Vol. IV p. 32. 31-32) :

Cakkhuñca paṭicca rūpe ca uppajjati cakkhuviññāṇaṃ || tiṇṇaṃ saṅgati

48) 六処 (saḷāyatana) という用語が縁起説の展開過程で構築された可能性があることについては、拙稿「「六処」という用語と縁起説」『佛教論叢』第60号 (掲載予定) にて論じた。

phasso||phassapaccayā vedanā||

眼と諸色によって眼識が生じる。三つの和合が触である。触という縁により受がある。

{(眼 (cakkhu)・色 (rūpa))→眼 識 (cakkhuvīññāṇa)}=触 (phassa)→受 (vedanā)

以上のような認識過程である。縁起説の展開に関する従来の研究の中には、この三事和合説から「六処 (saḷāyatana) →触→受」を見出したとするもの<sup>49)</sup>も見られ、その可能性を否定することもできないが、ここでは「六処→触→受」により類似した用例を示す。

SN. 35, 195<sup>50)</sup> (Vol. IV p. 171. 23-24) :

Evam eva kho bhikkhave cakkhusmiṃ sati cakkhusamphassapaccayā  
up pajjati ajjhattam sukhaṃ dukkham||

「比丘たちよ、このように眼がある時、眼触という縁により内に楽と苦が生じる。」

この資料には、「感覚器官→触→楽苦」という認識過程が説かれており、縁起説における「六処→触→受」を想起させるものである。

SN. 14, 5 (Vol. II pp. 142. 29-143. 2) :

Cakkhudhātum bhikkhave paṭicca up pajjati cakkhusamphasso||cakk-  
husamphassam paṭicca up pajjati cakkhusamphassajā vedanā||No cak-  
khusamphassajaṃ vedanam paṭicca up pajjati cakkhusamphasso||no  
cakkhusamphassam paṭicca up pajjati cakkhudhātu||

比丘たちよ、眼界によって眼触が生じる。眼触によって眼触から生じる受

49) 宮本正尊 [1974b: p. 58] 平川彰 [1: p. 408]

50) Cf. SN. 35, 196 (Vol. IV p. 172)

が生じる。眼触から生じる受によって眼触が生じるのではない。眼触によって眼界が生じるのではない。

この資料では「界→触→受」という認識過程が説かれており<sup>51)</sup>、「六処→触→受」に類似している。興味深い点は「受→触→界」という逆の縁起関係を否定するところである。

このように、縁起説以外の資料を調査しても、「六処→触→受」という縁起関係に類似したものを見出すことができ、これらの認識過程に基づいて、「六処→触→受」という縁起関係が縁起説の展開過程で構築されたのではないだろうか。

## 2.3. 識について

ここでは、散文資料における識 (viññāṇa) について考察する。

MN. 43 (Vol. I p. 292. 23-27) :

Viññāṇaṃ viññāṇaṃ ti āvuso vuccati. Kittāvatā nu kho āvuso viññāṇaṃ ti vuccatīti. Vijānāti vijānātīti kho āvuso, tasmā viññāṇaṃ ti vuccati. kiñ ca vijānāti: sukhaṃ ti pi vijānāti, dukkhaṃ ti pi vijānāti, adukkhamasukhaṃ ti pi vijānāti. ...

「友よ、『識、識』と言われます。友よ、どれだけで識と言われるのか。」

51) この認識過程を解説する資料があるので以下に示す。

SN. 35, 130 (Vol. IV p. 115. 10-16) :

Kathaṃ nu kho bhante dhātunānattam paṭicca uppajjati phassanānattam || phassanānattam paṭicca uppajjati vedanānānattanti || ||  
Idha gahapati bhikkhu cakkhunā rūpaṃ disvā manāpam Itthetanti pajānāti cakkhuviññāṇaṃ sukhavedaniyam || sukhavedaniyam phassaṃ paṭicca uppajjati sukhavedanā || ||

「大徳よ、どのように界の多様性によって触の多様性が生じ、触の多様性によって受の多様性が生じるのか。」と。

「長者よ、ここに比丘が眼によって快き色を見て、ここにこれがあると知る。眼識は楽を感受するものであり、楽と感受されるべき触によって楽受が生じる。」

「友よ、『識別する。識別する。』と、それ故、識と言われる。」「また、何を識別するのか。」「楽とも識別し、苦とも識別し、不苦不楽とも識別する。」「…

ここに説かれる識は受と同じ機能を持っていることが分かる。また、MN. 147 (Vol. III p. 279)<sup>52)</sup>では、cakkhusamphassapaccayā uppajjati vedanāgataṃ saññāgataṃ saṃkhāragataṃ viññāṇagataṃ (眼触という縁により、受に至ること、想に至ること、行に至ること、識に至ることが生じる。)と説かれ、この識は、触を原因として生じるものであるから、縁起説とは論理的に逆の構造をとっている。

これら二つの用例と先述した三事和合説を合わせて考えると、各支縁起説のうち、十支縁起説における認識過程(識→名色→六処→触→受)の識は、あらゆる認識作用を持つ用語の根本的な原因として捉えられているが、それとは対照的に、上の用例では識と受が同じ機能を持つ用語として扱われ、「触→識」という用例も確認された。また、三事和合説では、感覚器官とその対象が原因となって識が生じる。さらに、これは識と名色の相依関係を考察する上で引用すべき資料かもしれないが、SN. 22, 56 (Vol. III p. 61)では、Nāmarūpasamudayā viññāṇasamudayo (名色の生起により、識の生起がある。)と説かれ、「名色→識」という縁起説とは逆の論理が見られる。尚、最古層の資料<sup>53)</sup>でも「内面と外面、両方からの受を歓喜しなければ、識が減する」という縁起説とは逆の論理を説く用例を既に挙げている。

このように、縁起説における認識過程の識と縁起説以外の識とでは、その趣を異にしているように思える。これに対し、水野弘元 [1954: pp. 19-20] は、三事和合説における「根・境・識」と縁起説における「識・名色・六処」が表すところは同じであるとし、識の差異について、前者は識を認識作用と見たもの、後者は識を識体と見たものと述べる。

本稿でも、識に関して概ねこの水野説に準じ、縁起説における識を認識作用

52) Cf. SN. 35, 121 (Vol. IV p. 106)

53) Sn. 1111

の根本的な原因として見る理由は、識を主体として捉えているからであると考える。

それでは、その主体たる識と名色の縁起関係がどこから現れたのかというと、水野弘元 [1954 : p. 19] [1984 : pp. 122-123] は、先述した SN. 12, 19 の対応漢訳である SĀc (1). 294 に説かれる「身内有此識。身外有名色。」の關係に注目し、名色を識の対象と考え<sup>54)</sup>、これが識と名色の相依關係を表していると考えている。しかし、既に指摘したように、この解釈が南伝資料では註釈的な位置づけとなり、原型とは言い難く、本稿では *ayañceva kāyo bahiddhā ca nāmarūpaṃ* (この身体と外に名色がある。) と説く SN. 12, 19 を参考にし、主体である身体と客体である名色という關係性のみを読み取った。

そこで、水野説を裏付けるため、身体と識の關係を説く用例を挙げることにより、SN. 12, 19 に説かれる認識過程に基づいて、縁起説の認識過程が説かれるようになった可能性を指摘したい。

*idañ ca pana me viññāṇaṃ ettha sitaṃ ettha paṭibaddhaṃ ti* <sup>55)</sup>

また、この私の識は、ここ（身体）に依存し、ここ（身体）に結びついている。

*yadā 'yaṃ kāyo āyu-sahagato ca hoti usmā-sahagato ca viññāṇa-sahagato ca, ...* <sup>56)</sup>

この身体が寿命を伴い、熱を伴い、識を伴う時、…

*... pe ... atikkamma ca purisassa chavi-maṃsa-lohitaṃ aṭṭhiṃ paccavekkhati, purisassa ca viññāṇa-sotaṃ pajānāti ubhayato abbocchinnaṃ*

54) 中村元 [16 : p. 498] は、識が人間の主観面を示し、名色がウパニシャッドにおける用法に従って、客観面を示していると述べる。

55) DN. 2 (Vol. I p. 76) MN. 77 (Vol. II p. 17)

56) DN. 23 (Vol. II p. 335)

idha-loke patiṭṭhitañ ca para-loke patiṭṭhitañ ca.<sup>57)</sup>

〔この身体において、髪、毛、爪、…小便がある。〕そして、人の皮膚と肉と血を越えて、骨を観察する。また、人の識の流れが両方から断たれておらず、この世で確立し、あの世で確立するのを知る。

Yadā kho āvuso imaṃ kāyaṃ tayo dhammā jahanti: āyu usmā ca viññāṇaṃ, athāyaṃ kāyo ujjhito avakkhitto seti yathā kaṭṭhaṃ acetanaṃ ti.<sup>58)</sup>

友よ、三つのもの、すなわち寿命、熱、識がこの身体を捨てる時、この身体は意思のない木片のように、捨てられ、投げられ、横たわる。

imasmim ca saviññāṇake kāye bahiddhā ca sabbamittesu...<sup>59)</sup>

この識を伴う身体と外は一切の特徴に対して…

以上の用例から、身体は識を伴っており、また古層にも見られたように、識は生命を存続させる要素として用いられている。換言すれば、識が身体に付随しているため、認識作用が働くとも考えられる。そして、そのことを示す資料として DN. 23 (Vol. II p. 338) には yadā 'yaṃ kāyo āyu-sahagato ca hoti usmā-sahagato ca viññāṇa-sahagato ca, tadā abhikkamati pi paṭikkamati pi tiṭṭhati pi nisīdati pi seyyam pi kappeti, cakkhunā pi rūpaṃ passati... (この身体が寿命を伴い、熱を伴い、識を伴う時、進みもし、戻りもし、立ちもし、座りもし、臥しもし、眼によっても色を見、…) という用例も見られ、識が備わっていることにより、感覚器官が機能していることを示していると言える。したがって、このような識を想定すれば、識を認識作用の根本的な原因と見る

57) DN. 28 (Vol. III p. 105)

58) MN. 43 (Vol. I p. 296) Cf. SN. 22, 95 (Vol. III p. 143)

59) MN. 109 (Vol. III p. 18) MN. 112 (Vol. III p. 32) SN. 18, 21 (Vol. II p. 252) SN. 22, 72 (Vol. III p. 80) SN. 22, 82 (Vol. III p. 103) SN. 22, 91 (Vol. III p. 136) SN. 22, 92 (Vol. III p. 137) SN. 22, 124 (Vol. III p. 169) SN. 22, 125 (Vol. III p. 170) AN. 3, 32 (Vol. I p. 132)

ことにも首肯できよう。

そして、身体は識を伴うものであるということに着目し、SN. 12, 19の身体 (kāya) は、梵文や漢訳、さらには註釈書のように、識を伴う身体 (saviñ-ñāṇako kāyo) と解釈され、各支縁起説の認識過程に影響を与えたのではないだろうか。以上の理由により、本稿でも水野説に準ずる。

そこで、主体たる識の用例を一例挙げる。

MN. 138 (Vol. III p. 223. 8-14) :

Tathā tathā, bhikkhave, bhikkhu upaparikkheyya yathā yathā 'ssa upaparikkhato bahiddhā c' assa viññāṇaṃ avikkhittaṃ avisaṭaṃ ajjhattaṃ asaṅghitaṃ anupādāya na paritasseyya; bahiddhā, bhikkhave, viññāṇe avikkhitte avisaṭe sati ajjhattaṃ asaṅghite, anupādāya aparitassato āyatiṃ jātijārāmaṇaḍukkkhasamudayasambhavo na hotīti.

比丘たちよ、比丘は、観察する時、外に彼の識が散乱せず、広がらず、内に留まらず、執着せず、恐れないように観察すべきである。比丘たちよ、外に識が散乱せず、広がらず、内に留まらずにある時、執着せず、恐れな  
い者にとって、未来に生老死という苦の生起や発生はない。

この用例の後、下線部に関してマハーカッチャーナが解説するが、それによれば、識が外に散乱したり、広がるとは識が六つの感覚器官の対象に縛られることであり、内に留まるとは識が色界四禪で得た境地に縛られることである。下線部を見れば、この文章の主語は識であり、識が執着しない (anupādāya) よう促されている。ここでの執着は縁起説に見られる取 (upādāna) と同じ接頭辞と語根である。さらに、後半には生老死といった苦を表す単語も見られる。したがって、この資料には「識…取…苦」という関係が識を主体として説かれていることになり<sup>60)</sup>、五支縁起説にも見られる取と主

60) 次の資料もこの関係に類似している。

SN. 35, 118 (Vol. IV p. 102) :

tassa tam abhinandato abhivadata ajjhosāya tiṭṭhato tannissitaṃ viññāṇaṃ hoti

体たる識が関連しているという点で、五支縁起説に「識→名色→六処→触→受」という縁起関係が導入された意図を探る資料になり得る。

## 2. 4. 小結

散文資料における認識過程を考察した。以下にまとめる。

- ・ SN. 12, 19の資料から、各支縁起説の支分に類似した単語を用いた認識過程を見出すことができた。
- ・ 感覚器官と触と受の関わりについて、三事合説と、「六処→触→受」に類似した認識過程が見られた。
- ・ 縁起説における識は、認識作用の根本的な原因であるが、縁起説以外の用例は必ずしもそういうわけではなく、それに反する用例も多い。したがって、縁起説に説かれる識はそれを主体として捉えたものであって、身体に付随しており、それがなければ生命を維持できないような識であると考えた。そして、身体は識を伴うものであるということから、SN. 12, 19の身体 (kāya) が識を伴う身体 (saviññāko kāyo) と解釈され、各支縁起説の認識過程に影響を与えた可能性を指摘した。また、「識…取…苦」という関係が説かれる資料も挙げ、五支縁起説に認識過程が導入された意図を探る資料になり得ることを述べた。

## 3. 結論

初期經典に見られる認識作用の用例を見てきた。以下にこれまでの考察をまとめ、加えて、十支縁起説における「識→名色→六処→触→受」という縁起関

---

tadupādānaṃ||Saupādāno devānam inda bhikkhu no parinibbāyati||

彼がそれ（色、声などの対象物）を歓喜し、迎え、執着し、固執して、住している時、それに依りかかった識があり、それに執着する。神々の王よ、執着を伴う者は般涅槃しない。

この用例でも、識が主体となり、識が執着していることが窺える。Cf. MN. 106 (Vol. II p. 265)



係を認識過程と見るべきか否かについて私見を述べる。

まず、韻文資料における認識作用を持つ用語の用例を調査した。最古層では、感覚器官とその対象が六つに分類されておらず、六処という用語も見られなかった。また、触は誤った見解を引き起こす原因として扱われており、さらに、「識の滅→名と色の滅」や「名と色→触→快、不快」のような、縁起説に説かれる縁起関係に類似した認識過程も読み取ることができた。古層では、感覚器官とその対象が徐々に六つに分類され始め、六つの処 (cha āyatana) や六触処 (cha phassāyatana) といった用語も見られる。受は一例しか見られなかった最古層に対し、多様に説かれ始める。また、最古層と同様、「識の滅→名と色の滅」の縁起関係が見られる。

縁起説を除く散文資料に説かれる認識過程として、SN. 12, 19に見られる認識過程、「六処→触→受」、三事和合説の三つを挙げた。特に SN. 12, 19に見られる認識過程は、各支縁起説における「識→名色→六処→触→受」に類似しており、その認識過程を軸にして、十支縁起説が構築された可能性も考えられる。しかし、各支縁起説に説かれる「名色→六処」の縁起関係は見られず、それに類するものも見られなかった。そのため、「名色→六処」の縁起関係は、縁起説の展開過程の中で構築された縁起説特有の関係である可能性が高いと言える。

以上の考察から、十支縁起説における「識→名色→六処→触→受」という認識過程は縁起説以外の資料から読み取ることができない。したがって、十支・十二支縁起説は理解しがたいと言われることは既に述べたが、認識過程として「識→名色→六処→触→受」の縁起関係が理解できないのは、当然のことなのかもしれない。それゆえ、十支縁起説における「識→名色→六処→触→受」という縁起関係は単なる認識過程ではなく、別の意図をもって構築された可能性が高いと言えるのではないだろうか。

〔付記〕

本稿を執筆するにあたり、並川孝儀教授より多大なご教示を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

【略号と先行研究】

- AN. *Āṅguttara-Nikāya*. PTS  
 Dhp. *Dhammapada*. PTS  
 DĀc. 佛陀耶舍共竺佛念譯『佛說長阿含經』 T01 (No.1)  
 DN. *Dīgha-Nikāya*. PTS  
 It. *Itivuttaka*. PTS  
 Nidd I. *Mahāniddeśa*. PTS  
 MN. *Majjhima-Nikāya*. PTS  
 Mvu. É. Senart. *Mahāvastu*. 3vols. Paris. 1882-1897  
 NidSa. Tripāṭhi, Chandrabhāl. *Fünfundzwanzig Sūtras des Nidānasaṃyukta*. Berlin. 1962  
 SĀc (1). 求那跋陀羅譯『雜阿含經』 T02 (No.99)  
 Sn. *Suttanipāta*. PTS  
 SN. *Samyutta-Nikāya*. PTS  
 Sn-a. *Suttanipāta-Aṭṭhakathā* (*Paramatthajotikā*). PTS  
 SN-a. *Samyuttanikāya-Aṭṭhakathā* (*Sāratthappakāsinī*). PTS  
 T 大正新脩大藏經  
 Th. *Theragāthā*. PTS  
 Thī. *Therīgāthā*. PTS  
 Ud. *Udāna*. PTS
- Aramaki [1985] Noritoshi, Aramaki. “On the formation of a short prose Pratītyasamutpāda sūtra” 『雲井昭善博士古希記念 仏教と異宗教』 平楽寺書店. 1985. pp. 87-121
- Bodhi [2000] Bodhi, Bhikkhu. *The Connected Discourses of the Buddha: A New Translation of the Samyutta Nikāya*: Wisdom Publications. 2000
- Tripāṭhi [1962] Tripāṭhi, Chandrabhāl. *Fünfundzwanzig Sūtras des Nidānasaṃyukta*. Berlin. 1962
- Vetter [1988] T. Vetter. *The Ideas and Meditative Practices of Early Buddhism*. Leiden, New York, København and Köln. 1988
- 荒牧典俊 [1976] 荒牧典俊. 「Suttanipāta 1032-1039: Ajitamāṇavapucchāについて」 『日本佛教学會年報』 41. 1976. pp. 1-16
- 片山一良 [相應部 3] 片山一良. 『パーリ仏典 <第3期> 3 相應部 因縁篇 I』 大蔵出版. 2014
- 中村元 [16] 中村元. 『中村元選集 [決定版]』 第十六卷 春秋社
- 馬場紀寿 [2003] 馬場紀寿. 「北伝阿含の註釈書の要素 ―縁起関連經典―」 『佛教研

- 究』31. 2003. pp. 193-219
- 平川彰 [1] 平川彰、『平川彰著作集』第一巻 春秋社
- 吹田隆道 [2013] 吹田隆道、『ブツダとは誰か』春秋社. 2013
- 舟橋智哉 [2003] 舟橋智哉,「縁起経における識・名色と渴愛」『印度学仏教学研究』52-1. 2003. pp. 324-327
- 水野弘元 [1954] 水野弘元,「十二縁起説について —特にその心理的見方—」『印度学仏教学研究』3-1. 1954. pp. 11-22
- 水野弘元 [1964] 水野弘元,『パーリ佛教を中心とした佛教の心識論』山喜房佛書林. 1964
- 水野弘元 [1984] 水野弘元,「原始仏教における心」『仏教思想 9 心』平楽寺書店. 1984. pp. 109-143
- 宮本正尊 [1974b] 宮本正尊,「原始仏教における縁起説の考察」『佛教研究』4. 1974. pp. 46-63
- 村上真完 [2006] 村上真完,「諸法考 —dhammaの原意の探求と再構築— (1) 諸法と縁起」『佛教研究』34. 2006. pp. 63-132
- 和辻哲郎 [5] 和辻哲郎,『和辻哲郎全集』第五巻 岩波書店